

# 4

## 支援事例

---



## 4 支援事例

### 受傷前からの特技を活かして、再就職した例

Aさん 40歳 男性 交通事故

【障害】軽度の右片麻痺、注意障害、記憶障害

【経過】Aさんはもともと物作りの職人で、電気工事の仕事に就いていた時に交通事故で脳を損傷しました。退院後、電気工事の仕事に復職しましたが、高所での作業中に話しかけられたりすると、左手に持っていたペンチの存在をすっかり忘れてしまい、高所から落下させてしまうような出来事が度重なりました。他にも予定や約束を忘れてしまうことがあり、外見では障害がわからないため、職場の同僚の理解がなかなか得られず、退職を余儀なくされました。



【対応】Aさんは、就労継続支援 B 型事業所に通所することになりました。事業所では、**どういった作業がその人の能力を活かせるか、また改善につながりやすいかを検討して、本人と相談した上で取り組む作業を決定**しています。Aさんは、忘れやすいことを前提に、注意を向けたり、見落としを確認したりする習慣を身につけたところ、早々に一般就労先も見つかり、再び物作りの仕事に就くことができました。

【ポイント】**本人の希望や様子をみながら、補完する方法を身につける**ことで、特技を活かして再就職につながる可能性があると考えられます。



## 環境を整えて、生活を再構築した例

Bさん 20歳 男性 交通事故

【障害】社会的行動障害（暴言・暴行、脱抑制）

【経過】Bさんは高校生のときに交通事故に遭いました。暴言・暴行が目立つようになり、相手構わず喧嘩するようになりました。事故前は友達も多く、勉強にもクラブ活動にも積極的に取り組んでいたため、あまりの変わりように家族はとて驚いていました。時間やルールを守らなくなり、注意すると暴れて手がつけられなくなります。夜遅くまで外を出歩き、両親が何度も警察に迎えに行きました。学校にも行かなくなり中退しました。家族の財布からお金を持ち出して、遊びに費やすようになりました。友人とトラブルを起こして引きこもり、入浴や歯磨きも面倒になり、部屋も荒れ放題でした。



【対応】家族が保健センターに相談し、専門外来の受診を経て、施設入所支援を利用することになりました。生活リズムが整い、運動の時間にサッカーをするのが楽しみになりました。昔に戻りたいで楽しかったそうです。シュートを決めて誉められたときには、嬉しそうに笑っていました。事故後、Bさんは周囲から叱られ否定されることばかりで、親子でも会話らしい会話をしていなかったそうですが、今ではたまに帰ると、施設の行事や食事の話などをするそうです。行事では、他の利用者や職員と相談しながら企画を考えました。その過程で、肯定的な評価をされることで、少しずつ自信を取り戻していったようです。自分が他者の見本になること、サッカー以外でも他人から見られていることを自覚するにつれ、身だしなみや言葉遣いも変わっていきました。現在は進学するか就職するかを考えながら、まずは高校卒業資格の取得をめざして、引き続き入所して勉強しています。



【ポイント】家族の相談により、本人への関りや生活リズムの立て直しなどを含む対応についてのアセスメントが行われ、入所施設を利用することになりました。家族は本人ができるだけ回復してほしい気持ちから、時間やルールを守るように注意していたのですが、それまでの本人との違いへの驚きや悲しみなどもあるなかで、過去と比べての対応になりがちだったかもしれません。そのような状況では、できていないことの指摘が中心となり、本人家族とも見通しを持ちにくい状況が考えられます。Bさんは発達期にあることから、生活全般においての対応を以前からの特技も活用して安定をはかることで、家族との関係も再構築がすすみ、将来の目標を立てられるようになりました。



## 体験を通じて自信を取り戻し、社会参加を遂げた例

Cさん 55歳 女性 脳梗塞

【障害】意欲低下、麻痺、失語

【経過】Cさんは50代の前半に脳梗塞を発症して以来、右片麻痺と軽い失語症が残っています。ご家族によれば、結婚前は美容関係の仕事をしており、いつもおしゃれで、きれいに化粧をしていたそうです。料理も上手で、友人を自宅に招いて手料理を披露するのが楽しみだったそうです。発症後は、ミキサーや包丁などの調理器具がうまく使えず、洋服やバッグなども似合わないと言って、もう何もできなくなってしまったとふさぎこんでいました。



【対応】発症から3年経ち、ケアマネジャーに勧められて、通所介護サービスを利用することにしました。作業療法士と一緒に自助具を使いながら調理訓練を行ったところ、「片手でもできるのね」という発言が出ました。昔よりも段取りが難しくなったものの、ひとつひとつ指示を受けながら完成することができました。そこで次回からは、調理の手順書を作成し、必要な調味料や物品などをあらかじめ準備してから行ったところ、スムーズにできました。その後、自宅でもヘルパーサービスを導入して、あらかじめ準備しておいた手順書を見ながら、家族のために調理をするようになりました。次第に「自分で食材を選びたい」と話すようになりましたが、屋外歩行には見守りが必要で、発症後に独りで買い物に出たことはありませんでした。そこで電動カートを導入して練習し、徐々に一人で買い物に行けるまでになりました。今では外出が増え、友人と出かけたり、家族旅行を楽しんだりしています。



【ポイント】病識に乏しい人もいれば、Cさんのように自信や意欲を喪失している人もいます。Cさんは、**作業体験を通じて、できないと思っていたことが、工夫すればできることを発見**しました。また人から一つずつ指示を受けていた部分を手順書に置き換えても、同じように段取りよくできることがわかりました。それらが**自信回復**につながり、外へ出るきっかけにもつながったようです。



## 地域の機関が連携して、感情コントロール方法の体得を支援した例

Dさん 43歳 男性 脳出血

【障害】社会的行動障害（感情コントロールや対人技能の低下、こだわり）、注意障害、遂行機能障害）

【経過】Dさんはもともと土木作業員でしたが、脳出血で救急入院しました。退院後は麻痺が残らなかったため復職しましたが、すぐかっとなって何回も対人トラブルを起こしたため解雇されてしまいました。仕事を辞めてからは昼夜が逆転し、むしゃくしゃして家族に暴言をはくなどの行動も見られましたが、働きたいという気持ちは強くありました。Dさんの家族から相談を受けた指定特定相談支援事業所では、このようなケースは初めてだったため、どのような支援が適切であるか自立支援協議会で課題提起しました。支援拠点機関の相談支援コーディネーターから対人技能の訓練の必要性が指摘され、話し合いの結果、生活訓練を提案することになりました。



【対応】Dさんは、生活訓練サービスを利用することになり、対人コミュニケーションの改善、生活リズムの獲得、スマートフォン（スケジュール帳やメモ機能）の活用、作業能力の向上等を目標にしました。まず生活の枠組みをつくって混乱やイライラの元を減らし、振り返りやクールダウン方法の獲得、適切な行動を養めるなどを積み重ねることで、「キレル」前のセルフコントロールが可能になりました。また予定を確認し、工程にひとつずつ取り組むことで作業能力も向上しました。実習では「得意なことと苦手なこと」を知ることによって働く自信がついたようです。利用開始から9か月後に、就労支援センターから障害特性に合った求人の紹介を受け、Dさんの再就職が決まりました。



【ポイント】行動の背景にある、働きたいという気持ちやうまくいかないことへの焦りをとらえ、対応する方法を身につけることで、トラブルの軽減や自信の獲得につながると考えられます。また適切な支援方法については、地域の自立支援協議会で課題提起したり、高次脳機能障害支援拠点機関に相談したりすることができます。

